

人類学から見た トランスナショナリズム研究

—研究の成立と展開及び転換⁽¹⁾—

上 杉 富 之

成城大学文芸学部・大学院文学研究科・教授

(E-mail : uesugi@seijo.ac.jp)

1990年代半ば以降、欧米ではグローバル化した大規模な人の移動の研究、特に移民が示す多元的帰属意識などの新しい社会・文化現象の研究において、「トランスナショナリズム」という概念が注目されている。近年、日本でもトランスナショナリズムの日本語訳ないし類似概念として「越境」ということばが普及し、人類学や社会学、国際関係論などの学界のみならずマスコミや映画、小説などにおいても今やごくふつうに見られるようになった。しかしながら、越境をめぐる議論はしばしば人や文化が国境を越えるという事実を強調するだけに止まり、トランスナショナリズム概念導入の契機となった、国境を越えた生活実践や複数の国への多元的帰属意識の出現というような新たな社会・文化的現象を対象化するには至っていないように思われる。

そこで、本論文ではまずトランスナショナリズム概念の成立と展開、転換を跡付け、多元的生活実践や多元的帰属意識こそがトランスナショナリズム概念の中核的要素であることを明らかにする。その上で、近年ますます顕著となりつつある移民たちの国境を越えた多元的生活実践や多元的帰属意識を対象化して調査研究するためには、トランスナショナリズム概念を的確に導入・援用することが必要であると論じる。

キーワード： グローバリゼーション、移民研究、トランスナショナリズム、
越境、多元的帰属意識

目 次

はじめに

1. トランスナショナリズム研究の成立と展開
 - 1) トランスナショナル意識の覚醒
 - 2) トランスナショナリズム概念の確立
 - 3) トランスナショナリズム研究の展開
2. トランスナショナリズム研究の転換
 - 1) 人類学における移民研究
 - 2) 移民からトランスナショナリズムへ
3. トランスナショナリズム研究の変遷
4. 人類学におけるトランスナショナリズム研究
 - 1) トランスナショナリズムの定義
 - 2) トランスナショナリズム研究の視点

おわりに

はじめに

1990年代半ば以降、欧米の人文・社会科学、特に国際政治学や人類学、社会学などの分野で、グローバル化した大規模な人の移動をめぐる諸現象を記述・分析する際に、「トランスナショナリズム」(transnationalism) という概念が注目されている (cf. Portes, Guarnizo and Landolt 1999: 217)。最近、日本でもトランスナショナリズム概念が徐々に浸透し始め、マスコミや言論界などにおいても、トランスナショナリズムの日本語訳ないし類似概念として「越境」という言葉が日常的に使われるようになった⁽²⁾。今や、映画や小説などのポップカルチャーの世界でも、トランスナショナルな社会・文化現象はごく

普通の題材となっている⁽³⁾。

しかしながら、トランスナショナリズムないし越境の意味内容はそれを使用する人ごとに大きく異なり、マスコミや言論界はもちろんのこと、人類学などの専門研究分野においても用語や概念に混乱が見られる⁽⁴⁾。その結果、日本では、トランスナショナリズムという概念が本来備えている分析概念としての有効性が十分には理解されず、従ってまた、その概念を用いた調査研究が大幅に立ち遅れているように思われる⁽⁵⁾。

本論文は、日本の諸研究分野で意味内容が錯綜・重複して不鮮明となり、本来の有効性を失いつつあるトランスナショナリズム概念を再構築する作業の手始めとして、まずトランスナショナリズム概念の成立と展開を跡付ける。すなわち、トランスナショナリズム概念がどのような社会・文化現象を概念化・対象化するために導入されたのかを確認し、トランスナショナリズム概念が時代とともに変化したことを指摘する。その際、特に 1980 年代後半の人類学の参入を契機として、トランスナショナリズム概念はその意味内容が「転換」したことを明らかにする。また、「転換」の結果として、専門分野ごとにトランスナショナリズム概念の用法や意味内容が大きく異なっていることも指摘する。その上で、最近の人類学分野の研究を比較検討してトランスナショナリズム概念を再定義する。そして最後に、現代のグローバル化した人の移動をめぐる諸現象を記述・分析する上で、トランスナショナリズム概念がどのような有効性を持ちうるのかを示す⁽⁶⁾。

1. トランスナショナリズム研究の成立と展開

「トランスナショナリズム」ないし「トランスナショナル」という用語ないし概念の成立と普及の歴史は定かでないとされている（江淵 2000 : 322 の注参照）⁽⁷⁾。しかし、Glick Schiller ら（Glick Schiller *et al.* 1992 : 2 footnote）は、少なくともトランスナショナルという言葉の成立はかなり古く、国境を越えて活動する多国籍企業を記述するためにこれまで長らく使用されてきたと言う。一方、Brettell and Hollifield (2000 : 15-16) は、トランスナショナリズムという用語の使用は案外新しくて 1990 年代初頭からで、当時顕著になりつつあった新たな社会・文化的な動きを記述・分析するために人類学者が使い始めたと言う。

トランスナショナルやトランスナショナリズムという用語・概念の成立に関する Glick Schiller らと Brettell and Hollifield の見解の相違は、一見すると、些細なものに過ぎない。が、トランスナショナルとトランスナショナリズムという用語・概念の起源をたどることは、それによっていったいどのような社会・文化現象に注目し、それをどのように対象化しようとしたのか（するのか）という本質的な問題と密接に関わっている。そこで、以下、まず、トランスナショナルないしトランスナショナリズムという用語・概念の成立と展開を明らかにしてみたい。

1) トランスナショナル意識の覚醒

国境を越えた諸現象という意味でのトランスナショナリズム概念の萌芽は、数百年前にはすでに存在していたという (cf. Portes *et al.* 1999: 224)。しかしながら、それらの現象を「トランス・ナショナル」(trans-national) ないし「トランス・ナショナリズム」(trans-nationalism) という新たな合成語を造って表現しようとしたのは、イギリスの著名な国際政治・経済評論家・Norman Angell (1872-1967) が最初であった (*Oxford English Dictionary*, 2nd ed., 1989, vol. 18: 417)。

Angell は第一次世界大戦前後に活躍した平和主義者で、1934 年には国際連盟を通した平和運動によってノーベル平和賞を授与されている⁽⁸⁾。Angell は 1910 年代初めに言論活動を開始したが、ヨーロッパを中心とした世界経済が相互に依存していることを指摘し、軍備拡張や領土拡大競争の末の戦争は何の利益ももたらさないことを主張した。彼の平和主義は当初熱狂的に迎えられたが、1914 年に第一次世界大戦が勃発するに及びまったく顧みられなくなった。

しかし、Angell の考え方は、第一次世界大戦後、戦争で疲弊した欧米の人々から再び支持を得ることとなった。彼は、1921 年に著した『勝利の報酬』(*Fruits of Victory*) で、戦争に勝った英国がいかに膨大な犠牲を払わなければならなかったかを糾弾し、国際協調の必要性を連綿と訴えた。その際、当時のヨーロッパ諸国がトランス・ナショナルな分業 (tran-national division of labour) (Angell 1972 [1921]: 13) によって相互依存関係にあり、また、輸送や信用取引がトランス・ナ

ショナルに機能している (operating trans-nationally) (Angell *ibid.* : 15) ことを特に強調した。この種の相互依存的経済関係を、Angell は国際的 (international) ではなく、トランス・ナショナル (超国家的 trans-national) な依存関係として概念化した (Angell *ibid.* : 62)。そしてまた、そこで生きる人々の生き方を、国際主義 (internationalism) に対してトランス・ナショナリズム (超国家主義 trans-nationalism) と表現したのであった (Angell *ibid.* : 298)。

以上のことから、1920 年代初頭には、国境を越えた経済的相互依存関係を強調したトランス・ナショナルやトランス・ナショナリズムという言葉がすでに欧米の言論界で使われ始めていたことがわかる。

しかしながら、その後の国際連盟の機能停止と第二次世界大戦の勃発に見られるように、世界は国家主義 (nationalism) によって分断され、Angell が主張した意味でのトランス・ナショナルな政治・経済的協調やトランス・ナショナリズムに基づく世界平和は長らく達成されなかった。従ってまた、Angell が唱えたトランス・ナショナルやトランス・ナショナリズムの概念も当時はほとんど顧みられず普及しなかった。このことは、当時、トランス・ナショナルやトランス・ナショナリズムという用語があくまでもハイフン付きの特殊な合成語であったことにも表れている。

2) トランスナショナリズム概念の確立

トランスナショナルないしトランスナショナリズムという言葉 (概念) が明確な実態をともなって用いられるようになるのは、第二次世

界大戦後の 1960 年代以降、特に 1970 年代に入ってからである。

国際政治学者として活躍したイギリスの Alastair Buchan は、1973 年にイギリス放送協会 (BBC) で放映された連続講演の中で当時の国際情勢を分析し、情報伝達や輸送技術の進歩により国境を越えた政治・経済活動はすでに無視しがたいと述べ、そのような状態をトランスナショナリズムという概念で表現した。Buchan の BBC 放送での講演は後に『リスナー誌』(*The Listener*) で刊行され、その際、トランスナショナリズムという言葉はハイフンなしの普通名詞・transnationalism として表記された (Buchan 1973: 844-845)。これが、トランスナショナリズムという概念が普通名詞として使用された最初の例である (OED 2nd ed., 1989: vol.18: 417 参照)。従って、この時期までにはトランスナショナリズムという概念が一般読者に容易に理解され、受容される程度にすでに浸透していたと思われる。

ところで、1960 年代以降、特に 1970 年代以降は、国境を越えて複数の国で経済活動を展開する「多国籍企業」(transnational corporation ないし multinational enterprise) の存在が注目されるようになった時期である。伊豫谷 (2002) によると、大規模な経済活動主体の活動領域と近代国家の主権の及ぶ範囲はもともと一致しておらず、その意味では、2ヶ国以上の国において資産を有する経済活動主体としての多国籍企業の歴史は古い。しかし、海外における活動の割合が高く、在外子会社を数カ国以上に持つ巨大企業としての多国籍企業が出現し、しかもこのような多国籍企業が国家 (発展途上国) をも世界戦略の中に全面的に包摂するようになるのは 1960 年代以降と言

われている。

以上のことを考慮すると、Buchan がトランスナショナリズムという概念で対象化しようとした 1970 年代初頭以降の世界情勢の特徴は、1960 年代以降に顕著となってきた国境を越えた多国籍企業の諸活動とそれにともなう諸現象であったということができよう。つまり、Buchan は、Angell が 1920 年代に注目を促し、1960 年代以降に多国籍企業の活動として顕著となった国境を越えた経済ないし政治現象を、トランスナショナリズムという用語で対象化・概念化しようとしていたのである。

しかしながら、Buchan が 1970 年代初頭に改めて提示したトランスナショナリズムという概念はもっぱら国家や多国籍企業レベルの現象に関してであった。従って、トランスナショナリズム概念の使用も国際関係論や国際政治学、国際経済学などの分野に止まっていた。

3) トランスナショナリズム研究の展開

トランスナショナルな現象がさらに注目されるようになったのは、1980 年代に入ってからである。この時期、国の境界を越えて世界的規模で経済活動を展開する多国籍企業の活動はさらに活発となる。

それに加え、1980 年代には、環境の悪化や資源・エネルギーの枯渇などが地球規模で論じられるようになった。そして、この種の地球規模の諸問題には、国境や国家の主権を重視するような従来の主権国家システムに固執しては有効に対応できないという認識が広まった。その結果、国境を越えた活動を通して地球規模の環境や人権問題

などに取り組む NGO（非政府組織）が設立され、その活動は国家といえども無視できないほどの影響力を持つようになった（大柴 2000：812 参照）。

このように、1980 年代はトランスナショナルに展開する多国籍企業の経済活動が質的・量的に飛躍的に増大したことで、地球規模の環境や人権問題に取り組む NGO が出現し大きな影響力をもち始めた時期であった。それに対応して、トランスナショナリズム概念は新たな現象を包含すべく意味内容が拡張するとともに広く一般に普及・定着したのである。

この時期、特に注目すべきことは、トランスナショナリズム概念が以前のように経済中心（多国籍企業の経済的影響力のみへの注目）ではなく、国際政治や社会運動（NGO の政治的・社会的影響力など）をも射程に入れたものへと拡大したことである。しかし、同時に注目すべきことは、この時期においても、トランスナショナリズム概念の適用があくまでも国際関係や国際機関・組織などをめぐる公的なレベルに限定されていたということである。

2. トランスナショナリズム研究の転換

1980 年代後半、移民研究の一環ないし延長として、人類学（ないし社会学）がトランスナショナリズム研究に積極的に取り組むようになった。これにより、トランスナショナリズム現象の新たな側面に注目が集まり、トランスナショナリズムの概念規定及び研究は新たな段

階に入った。その意味で、筆者は、1980年代後半以降のトランスナショナリズム概念及び研究の変化をトランスナショナリズム研究の「転換」と位置付けている。以下、人類学における移民研究の歴史を簡単に跡付け、その中で、トランスナショナリズム概念・研究がいか

に転換したのかを明らかにしてみたい。

1) 人類学における移民研究

人類学が移民現象に強い関心を持つようになったのはそう古いことではない。確かに人類学はヨーロッパ人の新世界（南北アメリカやオーストラリア）への移住や、それら移民と先住民の接触にともなう社会・文化変化（変容）について長年にわたって研究を行ってきた。しかし、外部との交流が比較的少ない、閉じた社会に住む「他者」を対象として成立した近代人類学は、その前提を崩すような移民やそれ

にともなう諸現象には大きな関心を払わなかった。この傾向は、いわゆる構造・機能主義人類学が強い影響力を持っていた 1950 年代末から 1960 年代初めまで続いた (cf. Brettell 2000: 97)^⑨。

ところが、1960 年代に入ると、オセアニアや南米、カリブ海沿岸地域社会に調査研究を拡大した人類学者たちは、調査地の農村部から国内の都市や先進国の都市へ大規模に移動する人々（すなわち移民）に関心を持たざるを得なくなった。と言うのは、閉鎖的で自己充足的だと思い込んでいた調査地の社会で、多数の村人、特に若者たちが農村部から国内あるいは海外の都市へ出稼ぎなどのさまざまな形で移動していることが明らかとなったからである。

例えば、Gonzales (1961) はカリブ海沿岸地域社会の労働移民を調査し、それまで一括されていた移民を「季節的」「一時的」「反復的」「継続的」そして「恒久的」移民の 5 種に類型化する必要があることを明らかにした。

かくして、1960 年代以降、人類学分野でも人の移動＝移民が常態であるとの認識の変化が起こり、農村部のみならず移住先の都市をも含めた農村研究や、都市に流入した「部族民」の研究（都市人類学）が盛んになっていった（cf. Brettell 2003 : ix-x）。

1970 年代半ば以降は、人類学における移民研究はアメリカやヨーロッパ、オーストラリア、中東、東南アジアの諸都市へと拡大していった。また、研究テーマ・トピックも移民の社会的側面ばかりでなく文化的側面へと広がっていった。その結果、個人や家族、世帯などのミクロレベルで、移民の送出国（社会）と受入国（社会）の両者を視野に入れた、移住の動機や継続の要因等に関する詳細な実証的研究が成されていった（例えば Du Toit 1975 ; McGee 1975 参照）。この種の研究は、1970 年代以降、各種の民族誌として次々と刊行されていった。

1970 年代の後半に特に注目を集めたのは、移民の出身国への回帰現象（return migration）であった。従来の移民研究では、移民は長期的には移民先国に同化吸収されると考えられていた。しかし、実際には、かなりの移民が同化吸収されずに出身国に帰還することが判明した。また、出身国（地域）への帰還の主な理由は移民先国での経済的失敗ではなく、受入国における排除や出身国に残っている家族との強

い親族紐帯であることが明らかにされていった。往々にして移民たちは当初より帰還を前提にしているのであって、このような場合、移民は永久的な移住者ではなく「一時的滞在者」(sojourner)と見なすべきであることも明らかにされていった。

さらに、1980 年前後以降、アメリカへやってくるオセアニアや南米からの移民たちが恒久的に移住(帰化)したり出身国に帰還せず、移民先国(アメリカ)と出身国の両者を頻繁かつ継続的に往来するような新たな移民形態が顕著になってきた(cf. Chaney 1979; Richardson 1983)。そして、この種の新たな移民形態が、「永久的な移民」や「移民の回帰」「一時的移民」「一時的滞在」など、これまでの移民研究で提唱されてきたどのような概念にも当てはまらないことが明らかとなってきた。そこで、この種の新たな移民現象を的確に対象化するために、1990 年前後、トランスナショナリズムの概念が使用されたのである。ただし、すでに明らかにしたように、この時点でトランスナショナリズムの意味内容はそれまでとはまったく異なったものとなっている。

2) 移民からトランスナショナリズムへ

1980 年代以降、人類学や社会学を中心に、移民先国と出身国の国境を越えた、頻繁かつ継続的な往来という新たな移民現象に関する報告が蓄積されていった。しかし、当初、この種の新たな移民現象を的確に対象化し比較検討する有効な概念がなかったため、報告は個別的な民族誌的報告に止まっていた。従って、この種の現象が世界的な規

模で同時に進行しているという認識にも至らず、包括的・体系的な理論も進まなかった。この種の新たな移民現象を対象化し比較検討する概念装置こそが、1990年代以降に新たな意味を付与されたトランスナショナリズムであった。

1990年代以前の移民研究では、移民は最終的には受入国に同化吸収（帰化など）されるか、さもなければ出身国に半永久的に帰国するものと考えられていた。ところが、1980年代後半以降、移民先国に同化吸収されることもなく、また、出身国に帰還もしないような移民が目立つようになった。1990年代に入ると、この種の移民が移民先国と出身国の間を頻繁に往復し、双方の国に対して帰属意識を持ち（二重国籍ないし市民権を持ち）、国境を越えたさまざまな社会的ネットワーク（多元的ネットワーク）を維持し、しかもそれらを主体的かつ戦略的に駆使していることが報告され始めた（cf. Basch, Glick Schiller and Blanc 1994）。

Portes ら（Portes *et al.* 1999 : 217-218）は、この種の移民が移民の送出国（出身国）と受入国（移民先国）の双方に国境を越えた強い人間関係を持ち日常的に双方の言語を使うことなどを理由に、出身国と移民先国との言わば「二重生活」を送っていると見なした⁽¹⁰⁾。

Glick Schiller ら（Glick Schiller *et al.* 1992a, 1992b）や Basch ら（Basch, Glick Schiller and Blanc 1994）、Portes ら（Portes *et al.* 1999）は、この種の新しい現象こそをトランスナショナリズムの概念で対象化し、記述・分析すべきだと考えたのである⁽¹¹⁾。

人類学や社会学では、1990年代の初頭以降、以上のような国境を

越えた多元的帰属意識と多元的ネットワークの存在を強調する概念としてトランスナショナリズムが再定義されることとなった (cf. Glick Schiller *et al.* 1992a)。これを契機として、人類学や社会学分野では、国境を越えた多元的帰属意識や多元的ネットワークの存在などの諸現象に関する研究は移民研究というよりもむしろ、それから独立したトランスナショナリズム研究と位置付けられるようになって来ている。

3. トランスナショナリズム研究の変遷

以上、トランスナショナリズム概念・研究の成立、展開及び転換を時系列に従って述べてきた。その結果、同じトランスナショナルないしトランスナショナリズムという用語や概念を使っている、年代や専門分野に応じて研究のレベルや研究対象となる活動主体とレベル、主要研究項目等に大きな変化があることが明らかとなった。それをまとめたものが表1である。(表1 参照)

第一段階は、1920年代のトランスナショナル意識(研究)の「覚醒期」とでもいうべき段階である。当時、ヨーロッパ各国が国境を越えて経済的に相互依存関係にあることが強調され、それが初めてトランスナショナルな現象として認識された。ただし、この場合、トランスナショナルな相互依存はあくまでも国家間の関係(国際関係)、すなわちマクロ(巨視的)レベルにおいてのみ想定されていた。

その後、トランスナショナルな政治・経済的相互依存関係が存在しなかったわけでは決してない。しかし、第二次世界大戦の勃発に象徴

表1 トランスナショナル研究の変遷

	覚 醒 期	確 立 期	展 開 期	転換期以降
年代	1920年代	1970年代	1970年代後半～ 1980年代	1980年代後半～、特に1990年代半ば以降
主要研究分野	国際政治学	経済学、国際関係論	国際関係論、政治学、経済学	人類学、社会学
研究レヴェル	マクロレヴェル	マクロレヴェル	マクロレヴェル	ミクロ～メゾ（ミドル）レヴェル
焦点となる活動主体	国際連盟などの国際機関	多国籍企業	多国籍企業、NGO	労働移民、移民コミュニティ
活動レヴェル	高位	高位	高位	低位～中位
主要研究項目		国家の主権と多国籍企業の経済活動	多国籍企業・NGOの政治・経済活動、集団としての労働移民	移民の回帰、移民の多元的帰属・多元的ネットワーク、クレオール文化、エスニシティ、グローバリズム、多文化主義
関連研究分野	政治学、経済学	政治学	社会学、移民研究、人権・環境論	国際関係論、政治学、経済学、教育学、メディア論

1111

されるように、世界は国家主義（ナショナリズム）に基づく植民地拡大競争や武力衝突を繰り返すこととなった。その結果、トランスナショナルな現象に注目が集まることはしばらくなかった。

トランスナショナルな現象が再び注目を集め、明確な実体をともなったものとしてトランスナショナリズム概念が確立したのは 1970 年代初頭であった。1960 年代後半以降、特に 1970 年代以降には、国の境界を越えた多国籍企業の活動が活発化し、それにともなう諸現象がトランスナショナリズムの概念によって説明されたのである。この時期（トランスナショナリズム研究の「確立期」）には、経済学や国際関係論分野を中心にして、国家の枠組みを越えて利益を追求する多国籍企業の諸活動に関する研究が盛んに行われた。しかしながら、多国籍企業の経済活動や関連国の主権をめぐる問題などが主要な研究項目であったがゆえに、「確立期」の研究レベルはマクロレベルに止まっていた。

1980 年代に入ると、多国籍企業に加え、国境を越えて地球規模で環境や人権問題などに取り組む NGO の活動が無視しえなくなった。この時点で、トランスナショナリズム概念はただ単に多国籍企業等の経済活動だけでなく、NGO の国境を越えた政治・社会的活動をも対象とする概念として拡大して使用されるようになった。これが第三段階のトランスナショナリズム研究の「展開期」である。

「展開期」に、NGO とともに国境を越えた現象に関わるものとして注目を集めたのが世界規模で見られた大量の労働移民である。この時期、世界の国々や地域は「世界経済システム」へ組み込まれ、「南」

から「北」へと大量の労働移民が移動していった。社会学や経済学では、労働移民の移住先国での「同化吸収」ないし「不適合」過程などが主要な研究テーマ・トピックとなっていた。

そして、1980年代後半、特に1990年代以降は、人類学分野においてより微視的（マイクロ～メゾないしミドルレベル）研究が開始されるに至って、多国籍企業やNGOのような公的機関や組織よりもむしろ個々の労働移民や移民家族、移民コミュニティーに関する諸現象がトランスナショナリズムの主要な研究対象となってきた。

この時期、主要な研究テーマは従来のものとは大きく異なり、移民の出身国（送出国）への回帰現象や出身国と移民先国（受入国）双方への国境を越えた二重（多元的）帰属や多元的ネットワーク、さらにまた、その結果生じるクレオール文化など、雑種・混交文化の創出などへと移行した。トランスナショナリズム研究を担う主要研究分野や研究レベル、焦点となる活動主体、主要研究項目など、研究が根本的に変化したという意味で、筆者はこの時期をトランスナショナリズム研究の「転換期」と位置付けている。

4. 人類学におけるトランスナショナリズム研究

では、トランスナショナリズム研究の「転換」後、トランスナショナリズム研究の中核を担うこととなった人類学はトランスナショナリズムのどの点に注目し、どのような視点からアプローチしようとしているのだろうか。まず、人類学におけるトランスナショナリズムの定

義を比較検討して共通となっている要素を抽出し、トランスナショナリズム概念の再定義を試みる。その上で、トランスナショナリズム研究に貢献し得る人類学独自の視点を提示してみたい。

1) トランスナショナリズムの定義

すでに示したように、トランスナショナルな現象ないしトランスナショナリズムへの注目はかなり古い歴史を持つ。しかしながら、移民たちの多元的帰属意識や多元的ネットワークの維持に注目し、それらをトランスナショナリズム概念の中核に位置付けようとしたのはそう古いことではない。

トランスナショナリズム概念を人類学的な意味に再定義して体系化・理論化しようとしたのは、1990 年代初めの Glick Schiller らの試みが嚆矢と思われる (cf. Glick Schiller *et al.* 1992a : 5) ⁽¹²⁾。

Glick Schiller ら (Glick Schiller *et al.* 1992a : ix-x) は、1990 年に、それぞれが専門とするカリブ海社会やハイチ、フィリピンからのアメリカ移民に関する最新の調査資料を持ち寄って比較検討し、新しい移民形態の出現を確認するとともにその現代的意味を検討する研究集会を開催した ⁽¹³⁾。その研究集会で明らかとなったのは、当該移民がそれぞれの出身国と移民先国（アメリカ）の両者に帰属意識を持ち、両者にまたがる国境を越えたネットワークを長期間にわたって維持していることであつた。

Glick Schiller ら (Glick Schiller *et al.* 1992a : 1) はその種の現象が従来の移民概念では捉えられない新しい現象であると考え、トランス

ナショナリズムという用語を充てた。そして、Glick Schiller らはトランスナショナリズムを、従来の多国籍企業や国際機関に焦点を当てた定義とは異なり、「移民たちが出身国と移住先国の両者を結ぶ社会的な場を作る現象」(Glick Schiller *et al.* 1992a : 1) と定義した。すでに述べたように、この定義には、移民たちの国境を越えた多元的帰属意識や多元的ネットワークの生成や維持が含まれていることは言うまでもない。人類学において現在に至るまで引き継がれているトランスナショナリズムの中核的意味付けは、1990 年初頭の Glick Schiller らの以上の研究によってほぼ確定したと言って良いだろう⁽¹⁴⁾。

Glick Schiller らは、後に Basch らと定義を再検討した際 (Basch *et al.* 1994 : 7-9) に見られるように、上記のトランスナショナリズムの捉え方をほぼ一貫して踏襲している。1990 年代半ばに人類学・社会学分野のトランスナショナリズム研究を批判的に検討した Kearney (1995 : 548) も、Glick Schiller らの定義を援用し、トランスナショナリズムを複数の国の国境を越えた諸現象と定義している⁽¹⁵⁾。さらに社会学の観点からトランスナショナリズム研究を検討した Portes ら (Portes *et al.* 1999 : 219) も同様に、トランスナショナリズムを「国境を越えた、長期間継続する、規則的で持続した社会的接触に基づく生活形態や諸活動」と定義している。

これらに対し、イギリス・オックスフォード大学を拠点として大規模なトランスナショナリズム・移民研究を推進している Vertovec (1999 : 447) は、Glick Schiller らの定義には明示されていなかった多元的帰属意識や多元的ネットワークを強調し、トランスナショナリズ

ムを「国民国家の境界を越えて人や組織を結びつける多元的關係ないし相互作用」と定義している⁽¹⁶⁾。

以上の諸定義を整理すると、人類学におけるトランスナショナリズム概念の中核的要素は以下の諸点であるとまとめることができよう。すなわち、1) 複数の国の国境を越える現象であること、2) 長期間継続する現象であること、3) 規則的ないし頻繁に見られる往復運動であること、そして、4) 多元的帰属意識ないしネットワークが形成されていること、である。

これらの中核的要素を反映させて、筆者はトランスナショナリズムを、「複数の国の国境を越え、長期間継続して頻繁に見られる、移民の多元的帰属意識ないし多元的ネットワークをめぐる諸現象」と定義すべきではないかと考えている。このような定義を導入することにより、これまで日本であまり注目されてこなかった、トランスナショナリズムの多元性（多元的帰属意識ないし多元的ネットワークなど）に焦点を当てた研究がはじめて効果的に行われるのではないかと考える。

2) トランスナショナリズム研究の視点

トランスナショナリズム概念ならびに研究の体系化ないし理論化の試みは、人類学・社会学におけるトランスナショナリズム研究が比較的最近になって取り組まれたに過ぎないこともあって、あまり多くはない (cf. Guarnizo and Smith 1998: 3-4)。それでも、これまでに Bamyeh (1993) や Kearney (1995)、Guarnizo and Smith (1998)、Portes (1999)、Vertoveck (1999) らがトランスナショナリズム研究の

成果と問題点を整理し、今後の課題や可能性を検討している⁽¹⁷⁾。

それらの試みの中では、人類学ないし社会学を専門とする Vertovec による検討がもっとも体系的かつ包括的である⁽¹⁸⁾。そこで、ここではそれを紹介しつつ、人類学におけるトランスナショナリズム研究の枠組みを整理し、今後の可能性を検討してみたい。

Vertovec (1999) はこれまでのトランスナショナリズム研究の分析枠組みを整理し、「社会形態論」「帰属意識」「文化の再生産」「資本の流通経路」「政治参加の場」及び「地域性の再構築」の各側面にかかわるものがあるとして6つに大別している⁽¹⁹⁾。以下、それに従って順次その概略を述べてみたい。

①「社会形態論」としてのトランスナショナリズム

トランスナショナリズムを「社会形態論」(social morphology) として研究するに当たっては、第一に、国境を越えて広がるトランスナショナルな空間においていかに社会(集団)が形成されるのかということが問題とされる。この種の問題は、人類学では従来、各地に離散した民族の社会形成の問題、すなわちディアスポラ問題として研究されてきた。ディアスポラ研究では、離散した人々の同族意識と彼／彼女らが居住することができる領土(国家)への希求、そして彼／彼女らの祖先がやってきた故国への思いの三つの相互作用から、離散民族の社会形成が論じられてきた。トランスナショナルナリズム研究においても、同様の視点からの研究が可能であろう。

トランスナショナルナリズムを「社会形成」の観点から研究するに当た

っては、強固な社会構造や組織ではなく、緩やかに結ばれたネットワークへの目配りが重要となる。この場合のネットワークは、人と人との関係の網の目という意味での実在するネットワークとは限らない。情報技術が進歩した今日では、ネットワークはむしろインターネットなどで結ばれたバーチャル・ネットワークであって、それにより国境を越えたサイバー社会が形成されつつある。従って、実際の人のネットワークとともにサイバー・ネットワークによって結ばれたトランスナショナル・コミュニティに関する研究が必要となる。

この種のトランスナショナル・コミュニティの出現は、従来の国民国家観を揺るがし（脱国家化）、また、特定の民族・国民と特定の空間（領土）との結合を解体することになる（脱領域化）。

②「帰属意識」としてのトランスナショナリズム

トランスナショナリズムを帰属意識の観点から研究することも可能である。ディアスポラ研究では、故地と離散先の2つ（複数）の国ないし地域への二重帰属ないし多元的帰属意識の問題が取り上げられてきた（cf. Clifford 1994: 322）。トランスナショナリズム研究においても、この種の二重ないし多元的帰属意識が重要な研究課題となる。Portes ら（Portes *et al.*: 217）が述べるように、トランスナショナルな移民たちは出身国と移民先国の2つの言語を使い、2つの国に家を持ち、定期的かつ継続的に両者を往来するような生活を送っている。すでに述べたように、Glick Schiller ら（Glick Schiller *et al.* 1992a: 11）はこの多元的帰属性にこそトランスナショナリズムの現代的意味があ

ると指摘している。

現在、世界の半数以上の国が二重国籍を認めている。あるいはまた、国籍は与えないまでも、長年住む外国人に永住許可を与える例が珍しくない。これはすでに既成事実化しつつある多元的帰属を、国家が制度化するものに他ならない (cf. Uesugi 2003)。

多元的帰属を制度化するということは、これまでほぼ完全に離接していた（重なることがなかった）国民国家の主権と領土、国民が相互浸透的になっていることを意味する。言葉を換えて言えば、ここでも脱国家化と脱領土化が進行していると言えよう。

③「文化の再生産」としてのトランスナショナリズム

トランスナショナリズムを文化の生産という観点から見ると、これまで人類学で文化の混交やクレオール、ブリコラージュ、雑種性などとして研究されてきた文化の再生産に関する研究の延長線上にあることがわかる (cf. Appadurai 1990, 1996; Bhabha 1990; Clifford 1992; Hannerz 1996)。トランスナショナルな空間における新たな文化の再生産は特にファッションや音楽、映像などで注目されている。若者たちは衛星放送やインターネットなどのグローバル・メディアで得られる情報をもとに、国境を超えてファッションや音楽などの文化を生産し消費する。このようなトランスナショナルな文化の生産・消費の現場では、特定の国や民族への帰属意識が希薄化するであろう。また、衛星放送やインターネットによる情報の流れはただ単に国境を越えるだけでなく、各国・地域の規制の目を逃れることにもなるだろう。こ

れにより、トランスナショナルな「新たな文化領域」(Robins 1998)が形成されつつある。

④「資本の流通経路」としてのトランスナショナリズム

経済学や社会学、地理学等は、トランスナショナリズム現象の中でも特に多国籍企業の圧倒的な影響力と国境を越えた諸活動という点に注目してきた。この種の研究では、多国籍企業や国際機関など団体・機関の活動が主要な研究対象であった (cf. Pries (ed.) 2001)。しかし、近年、多国籍企業のエリートや世界的に活躍する官僚、政治家、専門家、経営エリートらを新たに出現しつつある「トランスナショナルな資本家階級」と規定し、彼／彼女らに関する研究が進められている (Sklair 1998)。トランスナショナルな資本家の関心は特定の地域や国に拘束されず世界全体に拡大し、しかも強大な影響力を持っていることから、この階級は「新パワー・エリート」と呼ばれることもある。

資本の流通経路としてのトランスナショナリズムという点では、多国籍企業のそれとともに、近年、移民たちの本国（出身国）への送金に注目が集まっている。フィジーやバヌアツなどのオセアニア諸国、フィリピン、アルジェリア、パキスタンなどの多くの移民送出国にとって、移民たちの本国への送金は今や国の財政を左右するほどになっている。そのため、それらの国々では、移民たちが本国への帰属意識を失わず本国へ送金し続けるように、移民を「再統合」(transnational reincorporation) (Guarnizo and Smith 1998: 8-10) する政策を取っている。そのような政策の一つが、移民先国の国籍を取得（帰

化) した後でも本国の国籍を維持することができるような二重国籍・多重国籍制度の導入である⁽²⁰⁾。

多国籍企業同様、ある特定の国や地域の移民たちは特定の国や地域だけでなくしばしば複数の国・地域に移住する。その結果、「資本の流通経路」としてのトランスナショナリズムも資本の再投資や送金として国境を越えて拡がり、多元的ネットワークを形成することになる。

⑤「政治参加の場」としてのトランスナショナリズム

これまで、国際赤十字や国連の諸機関をはじめとする国際的な非政府組織 (NGO) が活躍していた。しかし、これらの非政府組織は往々にして現在の国際関係や社会、政治制度を維持するという現状維持の機能を果たすにすぎなかった。ところが、近年、既存の社会や制度の変革を迫る、「トランスナショナルな社会運動組織」(Trasnational Social Movement Oranization : TSMO) としての NGO が多数設立され、活発に運動を展開している。TSMO は特に環境や人権、ジェンダー、平和問題を取り上げ、変革を迫っている。TSMO はもっぱら国境を越えた政治活動を展開するという意味で、トランスナショナリズムが政治の場において具体化したものであるということができよう。

一方、国境を越えて分散する移民が「脱領土的国民国家」(deteritorialized nation-state) (Basch *et al.* 1994) ないし「国境なき国家」(nation unbound) (Basch *et al.* 1994) を形成する動きも見られる。実際、Basch ら (Bash *et al.* 1994) の報告によると、ハイチ政府はかつて在外移民たちが第 10 番目の州を形成しているものと見なしてい

たという。この場合、ハイチは国境を越えた「領土」を有す、言わば「想像の（トランスナショナル）国家」を形成していたという言うこともできよう。あるいはまた、Kearney (1991) が報告するように、国境地帯に、国境のない「国家」を出現させることもある。Kearney によると、メキシコからやって来たインディオ農場移民労働者たちは、カリフォルニア南部に、アメリカ政府もメキシコ政府も統治できない独自の自治的空間（「国家」）を作り上げていたという。

「政治参加の場」としてのトランスナショナリズムは、一方では国境を越えて拡大する非政府組織の政治活動として、他方では、国境を越えた「想像の国家」として具体化していると言えよう。

⑥「地域性の再構築」としてのトランスナショナリズム

国境を越えた人の移動と、その結果としての多元的帰属意識の醸成にもかかわらず、特定の国や地域、場所に根ざしたアイデンティティや文化現象は無視しがたい。これは、グローバル化（グローバリゼーション）と表裏一体となってローカル化（ローカリゼーション）が進行しているという多くの報告が明らかにしている通りである。とすれば、トランスナショナリズムにおいて地域性はいかなるかたちで現われるのか。Appadurai (1995) や Goldring (1998)、Smith (1998) らはそれを「トランスローカリティー」(translocality) などの新たな概念（用語）で対象化しようとしている。しかし、その実態はまだほとんど明らかにされていない。

以上、Vertoveck (1999) の整理に従ってトランスナショナリズム研究の視点を 6 つに分けて検討した。この中で、①社会形態論としてのトランスナショナリズム、②帰属意識としてのトランスナショナリズム、③文化の再生産としてのトランスナショナリズム、⑥地域性の再構築としてのトランスナショナリズムの 4 点が、当面、人類学がもつとも貢献し得る分野となるであろう。その際、Guarnizo and Smith (1998) が区別した「上からのトランスナショナリズム」(transnationalism above) (多国籍企業や国家が主導権を握るマクロレベルのもの) と、「下からのトランスナショナリズム」(transnationalism below) (個々の移民たちが主導権を握る「草の根」レベルのもの) のうち、人類学が貢献できるのは主に後者のアプローチによるものとなる。

とは言え、①の社会形態論としてのトランスナショナリズムは社会学、③の文化の再生産としてのトランスナショナリズムおよび⑥地域性の再構築としてのトランスナショナリズムはカルチュラル・スタディーズ等の分野である程度研究が進められている。これに対し、②の帰属意識としてのトランスナショナリズムは、社会学やカルチュラル・スタディーズのいずれの分野でも研究が遅れている。特に多元的帰属意識や多元的ネットワークに関する調査研究は、これまでのグローバル化研究や「越境」研究では対象化されていなかったためほとんど扱われてこなかった。そういう意味で、人類学におけるトランスナショナリズム研究は、移民の多元的帰属意識や多元的ネットワークをめぐる諸問題に焦点を当てることで他分野の研究を補い、多大な貢献

を成し得るものと思われる⁽²¹⁾。

おわりに

1999 年現在、日本の外国人登録者数は 155.6 万人で、総人口の 1.2 パーセントと推定されている（日本労働研究機構（編）『データブック 国際労働比較 2003』⁽²²⁾）。これは 1985 年の外国人登録者数 85 万人の約 2 倍であり、近年、日本に滞在する外国人が急激に増加していることを示している。以上の数値は合法的に居住する外国人についてである。しかし、言うまでもなくビザの期限が切れて非合法に滞在する多数の外国人が存在し、それらを合計すると、在日外国人の数はさらに膨大となる。

以上のような量的変化とともに注目すべきことは、最近、日本に滞在する外国人が質的に変化していることである。一つには、戦前・戦中に日本にやって来た在日韓国人・朝鮮人や中国人ないしその子孫に代わり、1980 年代の高度成長期以降の外国人は、南米や南・西アジアなど多様な国の出身者となったという質的变化がある。

もう一つ、より重要な質的变化と思われるのは、日本に滞在する外国人の在り方が変化したことである。かつて日本にやってくる外国人労働者は短期間日本に滞在し、ある程度の収入を得ると出身国へ帰る「出稼ぎ移民」と考えられていた。ところが、近年、彼／彼女たちは比較的長期間日本に滞在し、時として日本人と結婚して日本に定住・帰化するようになってきた。あるいは、外国人として日本に滞在しつ

つ、出身国の親兄弟や第三国に長期滞在ないし定住する親類縁者と多元的な関係を継続的に維持する傾向にある。このような現象は、今までの在日外国人労働者には見られなかったことである。この種の新たな現象をいかに理解すべきであろうか。

アメリカやイギリス、オーストラリアなどの移民受け入れ大国では、現在日本で観察されているような人の移動に関する質的变化が 1980 年代前後から大規模に観察され始めていた。1990 年代に入ると、欧米の人類学や社会学研究者がこうした現象を「トランスナショナリズム」という概念によって対象化するようになったのはすでに述べた通りである。

そこで、本小論では、人類学におけるトランスナショナリズム研究の可能性を探る作業の手始めとして、トランスナショナリズム研究の成立と展開を歴史的にたどり、あわせて人類学におけるトランスナショナリズム研究の現状の確認と今後の課題を検討した。

その結果、トランスナショナルな現象への関心は少なくとも 20 世紀初頭にまでたどること、それが 1960～1980 年代の多国籍企業や国際的な NGO の活動の量的・質的増大にともなって実体をともなったトランスナショナリズム概念として成立したこと、さらに 1990 年代になって人類学の移民研究と結びつくことによってトランスナショナリズム概念が多元的帰属意識や多元的ネットワークを中核に据える概念へと転換したことが明らかとなった。

九
八

また、人類学を中心として転換後のトランスナショナリズム研究を比較検討し、トランスナショナリズムを「複数の国の国境を越え、長

期間継続して頻繁に見られる、移民の多元的帰属ないし多元的ネットワークをめぐる諸現象」と再定義することを提唱した。そして、人類学における最近のトランスナショナリズム研究の分析枠組・視点を整理し、多元的帰属意識や多元的ネットワークに焦点を当てたミクロないしメゾ（ミドル）レベルの研究が人類学的調査研究としてもっとも有望であることを示した。

とすれば、次なる問題は当然、トランスナショナリズム研究の中でもっとも重要な側面である移民の多元的帰属意識及び多元的ネットワークの実態をいかにして調査研究すべきかということになるだろう。この問題に関しては稿を改めて論じることとしたい。

註

- (1) 本論文は、成城大学民俗学研究所の研究プロジェクト・「現代日本の多元文化化—在日越境者の定着・定住化過程に関する文化人類学的研究」（研究代表・上杉富之成城大学文芸学部助教授・2001～2003 年度）及び成城大学特別研究助成研究プロジェクト・「地域社会再構築の比較文化史的研究」（研究代表・上杉富之成城大学文芸学部助教授・2003 年度）による研究成果の一部をまとめたものである。
- (2) 筆者は、transnationalism の和訳としては当初「越境」が適当ではないかと考えていた。しかしながら、transnationalism（ないし transnationalization）を、国際化（internationalism, internationalization）に対して、「民際化」と和訳しようとする研究者（江淵 1998:22）や、「越境」を crossing borders とみなし「トランスナショナリズム」とは別の概念とみなそうとする研究者もあり（例えば、綾部編 2002 参照）、transnationalism に「越境」という和訳を当てると混乱を招く恐れがある。

しかも、人類学・社会学では「越境」という用語をただ単に国境を越えるという意味合いで用いる場合が多い（もちろん、人類学や社会学分野でも「越境」をただ単に国境を越えることとしてではなく、脱領域化や多元的帰属なども問題として論じる研究者もいる（床呂 2002、町村 1998 参照）。そこで、本小論では transnationalism を「越境」と和訳せず、暫定的にそのままトランスナショナリズムと片仮名書きにすることとした。

- (3) 例えば、最近のものでは、『越境人たち一六月の祭りー』（姜誠著・2003 年）や『イサム・ノグチー宿命の越境者ー』（上・下）（ドウス昌代・2003 年）が「越境」を書名・題材としたノンフィクション小説として挙げられる。
- (4) 最近、突然脚光を浴びるようになったトランスナショナリズム概念には、欧米でさえも混乱が見られるという（Guarnizo and Smith 1998 : 3-4）。ましてや日本では、トランスナショナリズムと越境概念の同一視ないし混同が見られなど、用法に大きな混乱が見られる。トランスナショナリズムが国境を越えた人やモノ、情報、金融などにもなった諸現象を概念化する用語であることから、「越境」（crossing border, trans-border）とはほぼ同義ないし重複する概念とする研究者もいる（大谷 2002；桑山 2002）。しかし、本小論で後述するように、分析概念としては、両者は明確に区別されるべきであると筆者は考えている。ここで両者の差異を簡単に述べておくならば、「越境」が国境等の何らかの境界を越えるという空間的移動の事実のみを強調するのに対し、トランスナショナリズムは国境を越えた移動という事実だけでなく、それが継続的に繰り返されること、その結果として国境を越えた多元的ネットワークが形成・維持されること、さらにはそれにともなって多元的帰属意識が醸成されるようになることなどに焦点を当てる概念であると言えよう。以上のような点を考慮し、本論文では、「トランスナショナリズム」と「越境」を用語の上でも明確に区別するものとする。
- (5) 例えば、人類学分野では、最近刊行された『文化人類学最新術語 100』（綾部編 2002）の中で「トランスナショナリズム」（大谷 2002）が紹介さ

れているが、トランスナショナリズムをヒト、モノ、カネ、情報などが大規模に国境を越える過程を示す概念であると言うばかりで、その結果、ヒトが多層的な帰属意識を持ち、多層的なネットワークを駆使して生活戦略を展開するなどというようなトランスナショナリズム概念のもっとも重要な点が言及されていない。ただし、江淵 (2000: 298-324) は「越境の人類学—トランスナショナリズムとグローバリズム」の中で、トランスナショナリズム概念の要点をかなりの確に論じている。

- (6) 人類学におけるトランスナショナリズム研究の具体的な方法等については稿を改めて論じる予定である。
- (7) 正確に言うと、江淵 (2000: 322 の注) は transnationalism という用語の起源と普及は定かでないとして述べている。
- (8) Norman Angell に関する記述は、Frank N. Magill *et al.* (eds.) Dictionary of World Biography Vol. 7: The 20th Century A-GI (1999) の Norman Angell の項に依る。
- (9) 例えば、Brettell (2000: 97-98) は、1920～30 年代にニューギニアで調査をしたマーガレット・ミードが、ニューギニアの多数の若者が数年間にわたって出稼ぎに行き、そのためにビジン英語を熱心に習うほどであるという事実を一方で記しながら、首尾一貫して外部から隔離された動かない社会としてニューギニアを描写していたことを批判している。
- (10) この種の国境を越えた「二重生活」を送る場所としてのコミュニティは、特に「トランスナショナル・コミュニティ」(transnational community) と呼ばれることがある。
- (11) これに対し、ほぼ同時期に、Appadurai (1991) はこの種の新しい移民現象をグローバリゼーションの一環とみなして「グローバル・エスノスケープ」(global ethnoscape) と表現した。そして、グローバル・エスノスケープの中で、移民たちの国家権力への文化的抵抗や新たなクレオール文化の生成に注目しようとした。
- (12) Glick Schiller ら (Glick Schiller *et al.* 1992: 2 footnote) によると、例えば、アメリカ政治・社会科学学会 (The American Academy of Political and Social Science) では早くも、1986 年に開催された分科会のタイトル

に「トランスナショナル移民」(transnational migration)という言葉を採用していたという。しかし、同分科会の関心は移民の多角的帰属等をトランスナショナルの概念を導入することによって明らかにしようとするものではなかった。その意味で、ここで取り上げているトランスナショナリズム概念の理論化の動きとは根本的に異なっている。Appadurai (1991) も、1991 年には「トランスナショナル人類学」(transnational anthropology) を構想した論考を発表している。しかし、彼の場合も、トランスナショナル現象をただ単に国境を越えた社会・文化現象と言うに止まり、多角的帰属や多角的ネットワークの維持という意味での理論化を目指していたわけではない。

- (13) 1990 年に開催されたニューヨーク科学アカデミー (The New York Academy of Sciences) の研究集会での報告は、1992 年に、Glick Schiller らが編著した論文集として刊行されている (cf. Glick Schiller *et al.* (eds.) 1992)。
- (14) Glick Schiller らの見解に対し、人類学・社会学分野のトランスナショナリズム研究を比較検討した Kearney (1995: 548-549) は、トランスナショナリズムをグローバル現象の一形態としかみなしていない。そして、グローバル化が世界的現象であるのに対し、トランスナショナリズムは一つないし複数の国民国家内で生じる現象であるとする。また、グローバル化は普遍的で、個々人を越えた現象に関する概念であるのに対し、トランスナショナリズムは政治的かつイデオロギーにかかわるものであるという。と言うのも、グローバル化が「～化」(-ization) であるのに対し、トランスナショナリズムが「～主義」(-ism) だからであるという。しかし、少なくともこの点は Kearney の勘違いだと思われる。英語の語尾 -ism は必ずしも主義や主張を意味するものではなく、「アルコール依存症 (alcoholism)」に見られるように、症状や状態、現象を意味することもある。トランスナショナリズムはトランスナショナルな状態ないし現象を指すものと考えるべきであろう。
- (15) なお、Kearney (1995: 548) はトランスナショナリズムとグローバル化 (globalizaion) を対比させ、後者が特定の国から拡がっていく地球規模の

現象であるのに対し、前者は特定の国を起点としてその国の国境を越える現象に過ぎないと区別している。

- (16) 政治学、国際関係論を専門とする Castels and Miller (2003: 1) のトランスナショナリズムの定義（「複数の国に同時に影響力を行使する行為または制度」）はニュアンスをやや異にするが、基本的には人類学における定義と同じだといえることができる。
- (17) 社会学者の Bamyeh (1993) による、Current Sociology 誌の特集号での検討は比較的早い時期にトランスナショナリズムに注目したものである。しかしながら、Bamyeh は膨大な文献資料を比較検討してトランスナショナリズムの政治、経済、文化的基盤を論じるばかりで、トランスナショナリズムの理論的検討はほとんど行っていない。
- (18) イギリスの人類学・社会学者・Steven Vertovec はトランスナショナリズム研究をもっとも精力的に推進している人類学者の一人で、英国科学技術庁の経済社会調査委員会（ESRC: Economic and Social Research Council）の支援を受けて 1999 年～2003 年までの 5 年間にわたって実施された大規模研究プロジェクト・トランスナショナル・コミュニティに関する研究計画（Transnational Communities Programme）の研究代表を務めた（<http://www.transcomm.ox.ac.uk> 参照）。2003 年以降、同プロジェクトは、ESRC の移民、政策及び社会に関するセンター（Centre on Migration, Policy and Society: COMPAS [所長は Steven Vertovec] <http://www.compas.ox.ac.uk> 参照）の研究プロジェクトに引き継がれている。
- (19) 一方、例えば Portes (1999) は、トランスナショナリズムが見られる分野（経済、政治、社会・文化という 3 つの分野）と、トランスナショナリズムが制度化・組織化されるレヴェル（「低い」か「高い」かの 2 つのレヴェル）の 2 つの指標によってトランスナショナリズムの形態を 6 つに類型化している。
- (20) 移民の送出国が移民たちをつなぎ止める方法として二重国籍を容認している一方、移民の受入国は、移民を排除しつつ勧誘する政策の一つとして、移民への永住権付与を拡充しつつある（cf. Guarnizo and Smith

1998 : 8-10)。

- (21) トランスナショナリズムと言われる現象は移民の第一世代にしか見られず世代を経れば消滅するのであり、しかもそれは特定の国と地域（アメリカ南西部）に見られるものに過ぎないので過大評価をする必要はないという議論がある (Lucassen and Lucassen 1997 : 22-24)。このような批判に対し、Guarnizo and Smith (1998 : 16-17) は、トランスナショナリズム現象は現代の移民に普遍的に見られる現象であると反論している。
- (22) 2002 年末には日本の外国人在留登録者数は 177.8 万人で、総人口の 1.4 パーセントに達している。

引用文献

Angell, Norman

1972 [1921], *The Fruits of Victory : A Sequel to The Great Illusion, with a New Introduction for the Garland Edition by S. J. Stearns*. New York : Garland Publishing.

Appadurai, Arjun

1990, Disjuncture and Difference in the Global Cultural Economy, *Public Culture* 2-2 : 1-24.

1991, Global Ethnoscapes : Notes and Queries for a Transnational Anthropology. In Fox, Richard (ed.), *Recapturing Anthropology*, Santa Fe : School of American Research Press, pp. 191-210.

1995, The Production of Locality, in Fardon, Richard (ed.) *Counterworks : Migrating the Diversity of Knowledge*, London : Routledge, pp. 204-225.

1996, Sovereignty without Territoriality : Note and Queries for a Transnational Anthropology, in Yaeger, Patricia (ed.), *The Geography of Identity*, Ann Arbor : University of Michigan Press, pp. 40-58.

綾部恒雄（編）

2002, 『文化人類学最新述語 100』 東京：弘文堂。

Bameh, Mohammed A.

1993, Trend Report : Transnationalism, *Current Sociology* 41-3 : 1-101.

Basch, Linda, Nina Glick Schiller, and Cristina Szanton Blanc

1994, *Nations Unbound : Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*, Utrecht : Gordon and Breach Science Publishers.

Bhabha, Homi K.

1990, DissemiNation : Time, Narrative and the Margins of the Modern Nation, in Bhabha, Homi K. (ed.), *Nation and Narration*, New York : Routledge, pp. 291-322.

Brettell, Caroline B.

2000, Theorizing Migration in Anthropology : The Social Construction of Networks, Identities, Communities, and Globalscapes, in Brettell, Caroline B. and Hollifield, James F. (eds.), *Migration Theory : Talking across Disciplines*. New York : Routledge.

2003, *An Anthropology and Migration : Essays on Transnationalism, Ethnicity, and Identity*. Walnut Creek (CA) : Altamira Press.

Brettell, Caroline B. and Hollifield, James F. (eds.)

2000, *Migration Theory : Talking across Disciplines*. New York : Routledge.

Buchan, Alstair

1973, The Search for a New Order : The Last of Alastair Buchan's Reith Lectures. *The Listener* 20 December 1973 (vol. 90, no. 2334), pp. 844-845.

Castels, Stephen and Mark J. Miller

2003, *The Age of Migration* (3rd ed.), New York : Palgrave Macmillan.

Chaney, Elsa

1979, The World Economy and Contemporary Migration, *International*

Migration Review 13 : 204-212.

Clifford, James

1992, Traveling Cultures, in Grossberg, Lawrence, C. Nelson and P. Treichler (eds.), *Cultural Studies*, New York : Routledge, pp.96-116.

1994, Diasporas, *Cultural Anthropology* 9 : 302-338.

ドウス昌代

2003, 『イサム・ノグチー宿命の越境者—』(上・下) 講談社。

Du Toit, Brian

1975, A Decision : Making Model for the Study of Migration, in Du Toit, Brian and Safa, Helen I. (eds.), *Migration and Urbanization : Models and Adaptive Strategies*, The Hague : Mouton, pp. 49-74.

江淵一公

1998, 「トランスカルチュラリズムの研究」江淵一公(編著)『トランスカルチュラリズムの研究』東京:明石書店、21-78 頁。

2000, 『文化人類学 — 伝統と現代 —』東京:放送大学教育振興会。

Glick Schiller, Nina, Linda Basch and Cristian Blanc-Szanton

1992a, Towards a Transnational Perspectives on Migration : Race, Class, and Nationalism Reconsidered, in Glick Schiller, Nina, Linda Basch and Cristian Blanc-Szanton (eds.), *Towards a Transnational Perspective on Migration : Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered (Annals of the New York Academy of Sciences* vol. 645), New York : New York Academy of Science, pp. ix-ix.

1992b, Transnationalism : A New Analytical Framework for Understanding Migration, in Glick Schiller, Nina, Linda Basch and Cristian Blanc-Szanton (eds.), *Towards a Transnational Perspective on Migration : Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered (Annals of the New York Academy of Sciences* vol. 645), New York : New York Academy of Science, pp. 1-24.

九〇

Glick Schiller, Nina, Linda Basch and Cristian Blanc-Szanton (eds.)

1992, *Towards a Transnational Perspective on Migration : Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered* (*Annals of the New York Academy of Sciences* vol. 645), New York : New York Academy of Science.

Goldring, Luin

1998, The Apower of Status in Transnational Social Fields, in Smith, Michael P. and Guarnizo, Luis E. (eds.), *Transnationalism from Below*, New Brunswick (NJ) : Transaction Publishers, pp. 165-195.

Gonzales, Nancie L. Solien de

1961, Family Organization in Five Types of Migratory Wage Labor, *American Anthropologist* 63 : 1264-1280.

Guarnizo, Luis E. and Smith, Michael P.

1998, The Locations of Transnationalism, in Smith, Michael P. and Guarnizo, Luis E. (eds.), *Transnationalism from Below*, New Brunswick (U.S.A.) : Transaction Publishers, pp. 3-34.

Hannerz, Ulf

1996, *Transnational Connections : Culture, People, Places*, New York : Routledge.

伊豫谷登士翁

2002, 「多国籍企業」松原正毅・総合開発研究機構(編)『新訂増補版・世界民族問題事典』平凡社、644-645 頁。

姜 誠

2003, 『越境人たち一六月の祭りー』集英社。

Kearney, M.

1991, Borders and Boundaries of State and Self at the End of Empire, *Journal of Historical Sociology* 4 : 52-74.

1995, The Local and the Global : The Anthropology of Globalization and Transnationalism, *Annual Review of Anthropology* 24 : 547-565.

桑山敬己

- 2002, 「グローバリゼーション」綾部恒雄(編)『文化人類学最新術語 100』
弘文堂、54-55 頁。

Lucassen, Jan and Lucassen, Leo

- 1997, Migration, Migration History, History : Old Paradigms and New Perspectives, in Lucassen, Jan and Lucassen, Leo (eds.), *Migration, Migration History, History : Old Paradigms and New Perspectives*, Bern : Peter Lang, pp. 9-38.

町村敬志

- 1999, 『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社。

McGee, T. G.

- 1975, Malay Migration to Kuala Lumpur City : Individual Adaptation to the City, in Du Toit, Brian and Safa, Helen I. (eds.), *Migration and Urbanization : Models and Adaptive Strategies*, The Hague : Mouton, pp. 143-178.

Magill, Frank N. *et al.* (eds.)

- 1999, *Dictionary of World Biography Vol.7 : The 20th Century A-GI*.
Chicago : Fitzroy Dearborn Publishers.

日本労働研究機構(編)

- 2002, 『データブック国際労働比較 2003』労働政策研究・研究機構。

大柴 亮

- 2000, 「トランスナショナル・リレーションズ」猪口孝他(編)『政治学事典』弘文堂、812-813 頁。

大谷裕文

- 2002, 「トランスナショナリズム」綾部恒雄(編)『文化人類学最新術語 100』弘文堂、134-135 頁。

Oxford English Dictionary (2nd ed.)

- 1989, Oxford : Oxford University Press.

Portes, Alejandro, Luis E. Guarnizo and Patricia Landolt

- 1999, The Study of Transnationalism : Pitfalls and Promise of an

Emergent Research Field, *Ethnic and Racial Studies* 22-2 : 217-237.

Pries, Ludger (ed.)

2001, *New Transnational Social Spaces : International Migration and Transnational Companies in the Early Twenty-First Century*.
London : Routledge.

Richardson, Bonham

1983, *Caribbean Migrants : Environment and Survival on St. Kitts and Nevis*. Knoxville : University of Tennessee Press.

Robins, Kevin

1998, *Spaces of Global Media*, ESRC Transnational Communities Programme Working Paper No. 6.

Sklair, Leslie

1998, *Transnational Practices and the Analysis of the Global System*,
ESRC Transnational Communities Programme Working Paper No. 4.

Smith, Robert C.

1998, Transnational Localities : Community, Technology and the Politics of Membership within the Context of Mexico and U.S. Migration, in Smith, Michael P. and Guarnizo, Luis E. (eds.), *Transnationalism from Below*, New Brunswick (NJ) : Transaction Publishers, pp. 196-238.

床呂郁也

1999, 『越境—スルー—海域世界から—』(現代人類学の射程) 岩波書店。

Transnational

1989, *Oxford English Dictionary* (2nd ed.), Oxford : Oxford University Press, p.417.

UESUGI, Tomiyuki

2003, Introducing a Transnational Perspective : An Alternative Analytical Framework for Understanding the Border Dynamics of Sabah, East Malaysia. Paper presented at the seminar "Seminar

Brunei Darussalam-Jepun : Kajian Brunei-Borneo, " Bandar Seri
Begawan (Brunei), 11-12 August 2003.

Vertovec, Steven

1999, Conceiving and Researching Transnationalism, *Ethnic and Racial
Studies* 22-2 : 447-461.

Vertovec, Steven and Choen, Robin (eds.)

1999, *Migration, Diasporas and Transnationalism*, Chetenham, UK :
Edward Elger Publishing.

Transnationalism Studies Reviewed from an Anthropological Perspective

The Formulation, Development and Paradigm
Shift in the Concept of Transnationalism

Tomiyuki UESUGI

Professor of Social Anthropology

GRADUATE SCHOOL OF LITERATURE, SEIJO UNIVERSITY

(E-mail: uesugi@seijo.ac.jp)

Keywords : globalization, migration studies, transnationalism, *ekkyo*
(crossing borders), multiple identities

Since the late 1990s, some anthropologists have been trying to conceptualize the phenomena relating to immigrants' multiple identifications and/or networks across national boundaries as "transnationalism." Recently, its Japanese translation - or at least a word that describes a similar concept to transnationalism - *ekkyo* (literally, "crossing borders"), has been adopted and popularized among Japanese academics as well as in the Japanese mass media, movies and novels. However, in terms of the scope of the Japanese counterpart of transnationalism, *ekkyo* seems to be limited only to refer to the fact of people and cultures crossing (national) borders. Hence, the *ekkyo* concept does not properly address the emerging socio-cultural realities of multiple lifestyles and/or multiple national identities of migrants that transcend national borders, the articulation of which was the motivation for formulating the concept of transnationalism.

In this paper, I first review the historical development of the

concept of transnationalism: its conceptualization in the 1970s, development in the 1980s and paradigm shift in the middle of 1990s onwards. I will then demonstrate that as the result of that paradigm shift in the middle of the 1990s onwards, the core elements of transnationalism have been reformulated as being the multiplicity of life and/or belongings of migrants across national boundaries. Taking into consideration the multiplicity of migrants' lifestyles and/or identities in the age of globalization, I then discuss the potentiality of the transnationalism concept for an analytical framework to subjectivize the emerging dual or multiple identifications across national boundaries, which should be duly observed in anthropological migration studies.